

古い文章を肴に、一杯遣りながら、正義の話など。

会員 河崎 健一郎



ある止まり木にて

凝った肩を揉みながら事務所を出た。深夜の靖国通りに人の歩みは左程ないが、客を求めるタクシーだけが数珠つなぎのように連なっている。明日の朝のことを考えるなら素直にタクシーに乗り込む手もあるが、幸い頑張れば歩いても自宅には辿り着けるし、何より途上には行きつけの酒場がある。だから今夜も一杯遣ってから帰ろう。タクシー代を浮かせたそのお金で。

そんなわけで本稿も酒場の一隅で練っているわけだが、リレーエッセイというのは難しい。先月号担当の鈴木幹太氏はロースクール世代の法曹の一人として、現在の法曹養成制度の抱える問題点を指摘され、その適正化に向けた考え方について書かれている。私は彼とほぼ同意見なので、付け加えることは余りなく、あるとしても、「二回試験をネタに鬼の首を取ったように質の低下と叫ぶ人々は、そんなに質が心配なら何故免許更新制をいわないのだろうか」「ロースクール出るまでに1000万近く借金負わせといて、この合格率じゃ社会人は絶対来ませんよ」など、いささか場外乱闘気味の話になってしまいそうなので、そういった思いは、微かな溜息とともに、酒場の隅に置いておくことにしよう。

大岡越前は何を悩んだのか

むしろ今宵書きたいのは別のことだ。和光での修習生時代、飲んでばかりで落ちこぼれつつあった私は、考えてもどうせ分からない起案はとっとと終わらせ、樹林公園で毛虫を突いて動きを観察したり、図書室の一般図書を漁って暇潰しをしたりしていた。

その中の一冊に山田三川「想古録」（平凡社東洋文庫）があった。この本は、明治期の東京日々新聞（現在の毎日新聞）に連載された記事を纏めたもので、天保年間を中心とした江戸末期の幅広い簡潔な人物伝である。その中の一つに、あまり知られていない、大岡越前守がその職を辞する際のエピソードが書かれている。

「大岡越前守、久しく町奉行の職を勤め、聴訟断獄妙神に入ると称せらる、或る日書齋に在りて沈吟せしが、（中略）大判一枚を取出し、之を庭の飛石の上に置き、家僕に命じて庭園の掃除を為させめたり。」

そして大岡は掃除を終えた庭になお大判が残っているのを確認すると、やおら大判を自ら隠し、家僕に言うのである。お主、大判を盗んだであろうと。最初は否定する家僕であるが…、

「^{まっか}忽ち真紅に焼けたる鉄火箸を其の眼前に置き（中略）僕猶ほ屈せず、直ちに進んで焼火箸に向かひしが、珊瑚の火焰を吐くが如き紅閃々たる色を見て忽ち臆し、頭を低れ黙考する、暫時にして罪に服せり、此に至って大岡憮然として嘆息し、我は是まで官威に懼れ、拷問に苦しみ、冤枉の怨を呑んで服罪受刑せし者も多かるべし、ああ我過てりと（中略）、其翌日直ちに退職願を差出だせしとぞ。」

越前守は何故職を辞したのだろうか。拷問で白を得て断罪してきた過去を悔やんだからだけではないと私は思う。それなら職に在って審理を改めれば済む話だ。

私は思うのだ。きっと彼は、一時といえど、正義なるものを分かった気になってしまっていた、そんな自分自身を、許せなかったのではないだろうか。